

カンボジアの子どもたちの笑顔がいっぱいの写真集。どの子ども、目がキラキラと輝き、すなおで自然体、時々ちょっと恥ずかしそうな笑顔である。

決して裕福ではない、物売りの子どももいる、雨季になれば洪水で道が水浸しになり、水の中を歩いて学校に通う子どもたちもいる。でも、底なしの笑顔は、何なのだろう。見ているだけで明るく弾んでくるような写真は、あのポル・ポトの大惨事を経験した国の、平和になった姿である。子どもたちの祖父母や両親は、ポル・ポトのジェノサイドを体験した。それだからこそ、平和の喜びが、人々の笑顔からじかに感じられるのではないだろうか。

カメラマン・遠藤俊介さんの人柄も大きく影響している。彼は、自分自身が子どもなのである。一緒に遊ぶ時も、全く同じ目線で遊んでしまう。だから子どもが友達として安心して振舞うのであろう。数々のすばらしいショットはそうして生まれた。

彼は、実は私の勤務する東京工芸大学・芸術学部・写真学科の卒業生である。在学中から休みになるとすぐにカンボジアに飛んで行き、写真を撮っていた。ある時、「センセー、カンボジアの田舎をバイクで走ってたら、シュン！て呼び止められたんすよ。あんなところで友達にあうなんて、びっくりしたー！」と、とってもうれしそうに話していた。カンボジア人の友達はみな気さくで、彼を見つけるとすぐに声をかけてくれるようだった。またある時は「英語のテスト、たったの12点

でしたよー。クメール語だったらよかったのに」と。世界の人々と心を通わすのに必要なのは、何も英語だけではないのだと気づかされた一言だった。



た。カンボジアで亡くなったカメラマン・一ノ瀬泰造の最期の場所を見つけた、といい、一ノ瀬さんのお母さんにも連絡を取ってお知らせしていた。そのご縁で、本の帯に一ノ瀬信子さんが文を寄せてくださっている。

彼は卒業後アエラに勤め、カメラマンとしての力を蓄え始めた昨年秋、あろうことか、突然白血病に倒

れた。「絶対直って、彼女と一緒にもう一度カンボジアに行く！」それが彼の意志だった。闘病中もブログに日々の治療や生活の様子を書き込むだけでなく、カンボジアで撮った写真も載せていた。連合出版が本の出版を引き受けてくれて、治療の合間に写真の整理もした。

やっと完成した本を手にした3日後に、彼は力尽き、亡くなった。二人でカンボジアに行き、本に写っている子どもたちにこの本を手渡そう・・・と、最後まで、あきらめなかったという。

日本では憲法についての論議がやかましくなり、平和が脅かされそうな最近の風潮に不安を感じるこの頃である。ぜひ本書を通して平和のすばらしさ、ありがたさを感じて欲しい。多くの人が、そのメッセージを受け取ることが、志なかばで逝った遠藤さんへのせめてもの手向けになると信じている。